

平成29年度 シンポジウム 開催報告

こころをつなげて、四国はひとつ

「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進シンポジウム

- 日 時 平成29年10月29日(日) 13:30~16:00
- 場 所 サンポート高松 かがわ国際会議場 (香川県高松市サンポート2-1)
- 内 容 ■基調講演
「世界遺産をめぐる最近の動き」
松浦 晃一郎 氏 (「遅(つよ)い文化を創る会」代表、前ユネスコ事務局長)
- パネルディスカッション
「四国遍路の『顕著な普遍的価値』とは -世界に類を見ない円環構造の巡礼路-」
コーディネーター 西村幸夫 氏 (東京大学教授)
パネリスト 岩槻邦男 氏 (東京大学名誉教授)
五十嵐敬喜 氏 (法政大学名誉教授)
大石雅章 氏 (鳴門教育大学理事・副学長)
- 組 織 主催 「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会
協力 遅(つよ)い文化を創る会、四国遍路日本遺産協議会
後援 徳島県、徳島県教育委員会、高知県、高知県教育委員会、愛媛県、愛媛県教育委員会、香川県、香川県教育委員会、高松市

■ 概要

「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会は、平成29年10月29日(日)、香川県高松市のサンポート高松かがわ国際会議場において、世界遺産登録に向けた世界遺産登録推進シンポジウムを開催した。本シンポジウムは、前ユネスコ事務局長の松浦晃一郎氏が主宰する「遅い文化を創る会」の協力により、四国遍路の世界遺産登録に向けた有識者の座談会の内容を収録した



書籍『回遊型巡礼の道 四国遍路を世界遺産に』(2017年発行)の出版を記念して開催したもので、悪天候のなか約150人が参加した。四国遍路や世界遺産、法律、自然科学などの専門家が集まり、四国遍路の持つ魅力や世界遺産登録に向けた課題やその解決のための提言など、様々な視点から活発な意見交換が行われた。各分野の目から見た四国遍路のとらえ方に、改めて四国遍路の魅力を感じるとともに、世界遺産登録推進事業についての理解を深めていただく機会となった。

■ 関係者挨拶



「四国八十八箇所霊場と遍路道」
世界遺産登録推進協議会会長
千葉昭 (四国経済連合会会長)

シンポジウムの冒頭、本協議会の千葉昭会長は、昨年8月に四国遍路の新たな提案書を文化庁長官に提出し、四国内外から集まった20万人以上の署名とともに国内暫定リスト入りを要望したことを報告し、「今に生きる私たちが四国遍路を大切に保存し、世界に向けて発信しながら次世代へ確実に引き継ぐことが肝要と思う」と挨拶した。

開催県である香川県の浜田恵造知事は、各地に息づく四国遍路の文化をいかに保存・継承していくかが課題としたうえで、世界遺産登録の推進に努めた結果、史跡指定や日本遺産認定につながるなど、これまでの取り組みは着実に意味を持つと語り、「この価値あるものを後世に保存し遺していくためにも、世界遺産という形をぜひ実現していきたい」として、参加者に一層の理解と協力を呼びかけた。



「四国八十八箇所霊場と遍路道」
世界遺産登録推進協議会副会長
浜田恵造 (香川県知事)

■ 基調講演

「世界遺産をめぐる最近の動き」



「違い文化を創る会」代表 松浦晃一郎氏

1999年から2期10年にわたりユネスコ事務局長を務められた「違い文化を創る会」代表の松浦晃一郎氏に、世界遺産をめぐる近年の状況について講演いただいた。

2012年、世界遺産条約採択40周年記念行事の場で「京都ビジョン」が採択され、世界遺産登録において最も重要なこととして、地域社会が登録に向けた運動を盛り上げていくことや、登録された遺産をしっかりと保管理していくことが強調されているが、「四国ではしっかりと協議会が組織され、多くの方が協力されておられるのを非常に嬉しく思う」と語った。

世界遺産条約の採択から45周年、日本が参加して25周年を迎え、世界遺産の総数は1,073件となったが、今後は世界遺産への推薦が1国につき年1件に絞られるなど、入口で制約がかかり、かつ審査も厳しくなるという。世界遺産登録では、当時の原形がそのまま遺されている、または同じ材料・デザインで補修されている「真正性」と、完全な状態を保っている「完全性」の2点が重要になる。四国遍路と同じような道の資産の参考例として、サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路では、古い道が少ないフランスで道沿いの教会等を点でつないで道としたほか、国内でも紀伊山地の霊場と参詣道が古道を拡張したことなどを紹介し、「四国遍路の場合、ストーリーはしっかりしているが、課題は不動産の遺産が真正性・完全性という見地からどこまでカバーできるのかという点。ここをしっかりと検討する必要がある」と指摘した。

四国の今後の取り組みについて、「第一歩は何かと言えば、暫定リストに載せること」として、暫定リストの掲載資産が少なくなっていることに触れ、それを豊富なものにするために、「協議会や4県から、暫定リストの検討作業を進めてほしいことや、四国遍路を出したいということ、早めに繰り返す言うことが必要」と語った。なるべく早く暫定リストに載せてもらい、中身をしっかりと詰めて最終的にいい推薦書を出すというつもりで、「四国遍路の場合はしっかりとステップを踏んで一步一步前進し、時間がかかるということを覚悟した上でじっくり取り組んでいただきたいと思う」と提言した。

■ パネルディスカッション

四国遍路の『顕著な普遍的価値』とは ー世界に類を見ない円環構造の巡礼路ー

最初に、鳴門教育大学理事・副学長の
大石雅章氏から、四国遍路の歴史
についてお話しいただいた。四国遍
路は弘法大師ゆかりの霊場をめぐる
巡礼であり、16世紀頃を境として、
僧侶の修行としてめぐる四国辺路の
時代と、世俗の人が多目的でめぐる
四国遍路の時代に大きく分かれる。
大師修行の地で僧たちが修行し、四
国の人々が支えたことがお接待文化



左から、パネリストの岩槻邦男氏、五十嵐敬喜氏、大石雅章氏

へと転化し、江戸時代には多くの世俗の人々が遍路を行うようになったという。その歴史を踏まえ、辺地修行から民衆の巡礼へと変化したことや、弘法大師と共に歩き続ける最終目的地がない回遊型の巡礼であることが四国遍路の特徴であり、「権力者ではなく民衆が作ってきた、だからこそ出来上がった文化だということを価値化できないか」と語った。

東京大学名誉教授の岩槻邦男氏は、世界遺産を目指すためには「世界に誇るものを自分たちが持っているんだという意識を高めることが大事」とした上で、四国遍路が真言宗だけでなく他の宗派とも融合しながら展開したと考えられることや、四国が生物多様性に恵まれた豊かな地域であったからこそお接待が定着し、お接待を通じて四国の人々も遍路の精神を体得してきたのではないかと、という視点を提示した。

また、法政大学名誉教授の五十嵐敬喜氏は、自身の遍路体験から、個々の札所や遍路道が世界遺産の有名建築物等に匹敵するかはわからないが、なぜか強い魅力があると語り、四国遍路は宗教を越えたある種の文化、習俗になっており、「霊場や道などの不動産と心が密接に結びついて、いわば遍路を中心とした四国共同体が存在していることが新しい価値になるのではないかと提案した。

これらの論議をふまえ、コーディネーターの東京大学教授、西村幸夫氏は、遍路道は人の生活に近いところにあり、そこに熊野古道と違う意味があるように思うと指摘。「遍路」(henro) は道(物)や人、巡礼(事)などを表すが、いわゆる巡礼路とは違うという考え方を示すのも一つの方法と語り、「新しい論理で、物を人や事にうまく結びつけるような理屈を作ることが、非常に重要な戦略になってくる。」と提言した。また、国内暫定リスト改定の議論も少し始まっているので、地元から議論を盛り上げ、新しい世界遺産のものの考え方を示し、それが世界にとっても重要と発信していければ、前に進んでいくのではないかと、と締めくくった。



コーディネーターの西村幸夫氏